

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 古宮 路子

本論文は、20世紀ロシアの小説家ユーリー・オレーシャ（1899-1960）の長編『羨望』について、草稿の分析に基づいて執筆過程を明らかにするとともに、作者の意図に新しい光を当てようとするものである。オレーシャはこの作品の執筆に1922年から1927年6月まで取り組み、現在1000葉以上の草稿がモスクワの文書館に保管されているが、先行研究においては最初期と後期の執筆過程は分析されているものの、長い中間の時期は手付かずのままの状態だった。そこで古宮氏は、草稿における主要人物像の変遷に着目し、性格付けや特徴の変化を追うことにより、執筆過程を再構築するという難題に取り組んだ。

第1章から第3章では、小説の特異な二部構成と語りの問題について考察したうえで、『羨望』の主人公と普通見なされるカヴァレーロフの変遷を追う。最初期の構想では小説の中心はイヴァン・バービチェフだったが、後に語り手として導入されたカヴァレーロフは次第に存在感を増し、第1部の語り手に格上げされた。しかし、その一方で、オレーシャの自伝的要素が強いとされるカヴァレーロフには様々な否定的特徴を付与することにより一貫して「格下げ」が行われ、彼は作家とは区別されるべき「二流の詩人」になった。

第4章・第5章ではバービチェフ兄弟（アンドレイとイヴァン）の生成プロセスを分析している。アンドレイは коммуニストであるというよりは、社会に適応した「成功者」という側面が強調され、正統的な коммуニスト像から逸脱する特異な人物となった。一方、イヴァンは当初、ウェルズのSF小説に由来する「反社会的」な発明家として構想されたが、執筆の過程で彼の発明は実現しない空想に変わり、彼は社会に適応できない夢想家という位置づけになった。さらに第6章・第7章・第8章では、勃興する若い世代の代表格であるヴァーリヤとヴォロージャと、逆に革命後零落したアーニチカについて、それぞれの生成過程が分析されている。

本論文はこういった人物像の変遷に焦点を合わせながら、一定の説得力をもって草稿の執筆過程を推定している。それと同時に、執筆過程の諸段階で現れては消えていった様々な要素を前景化することによって、草稿を含む作品全体としてのテキストの予想外の豊かさを示すことに成功した。ただし、分析を個別の登場人物像に絞ったことの限界もある。作品構成や文体の面でオレーシャが発揮した独創性については踏み込んで論じられなかったし、登場人物の関係を通して現れる抒情とアイロニーの複雑な交錯の仕組みを解明することは今後の課題となった。

とはいえ、本研究は狙いも、調査対象も、また分析方法も究めて明確で、ソ連初期の小説についての生成論的研究という、日本では未開拓の分野への重要な貢献になっている。膨大な未公開草稿の全体を初めて詳細に分析し、執筆過程について仮説の次元とはいえ、明確な推論を導き出した成果は高く評価されるべきである。よって審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位に相応しいものと判断した。